1B-1-1

遊びを中心とした介入により見られた変化

関本　未紗
社会医療法人明和会　大曲中通病院

【はじめに】

今回，初めて発達障害の症例を担当させていただく機会を得た．はじめは身体機能を第一に介入していたが,「遊び」を中心としたプログラムに変更したことで座位姿勢の安定性・上肢機能・注意機能に若干の向上が見られた．その結果を，考察し報告する．なお，発表に際しては，保護者に口頭にて同意を得ている．

【症例紹介】

Ａさん，小学校4年生（特別支援学校在籍），脳性麻痺（痙性四肢麻痺）･精神運動発達遅滞．座位保持は困難で，室内は座位保持装置を使用しており，上肢動作は左手を優位に使用している．立位保持・歩行は困難で，移動はバギーを使用している．食事は一部介助にて可能だが，その他のADLは全介助レベル．コミュニケーションは理解良好で,発語は簡単な単語レベルは可能．激しく泣く･笑うと伸展パターンになりやすい．母親のNeedは一人でおすわり（あぐら座位）ができるようになること．母親から,ラジカセを操作してCDを聴くことや絵本を見ることが好きという情報を得た．

【介入経過】

＜第1期:姿勢に合わせて活動を提供していた時期＞

作業療法担当者が変更当初，人見知りはあったが，治療中の拒否などは見られない．理学療法士と2人で介入していたが,基本的には隔週当番制で行っていた．作業療法では，座位の安定性向上・座位での右手の参加を増やすことを目標に介入していた．長座位で後方から介助し，音楽が流れる絵本を用いて活動を行った．他の活動は受け入れてもらえないことが多かった．また，活動に集中する時間が短く，集中出来なくなった際に激しく泣くことが多かった．

＜第2期：「遊び」を中心としたプログラムに変更した時期＞

担当理学療法士と，遊びを中心としたプログラムを検討し，姿勢保持と遊びを提供する役割をそれぞれ分担した．ベンチ座位で座位保持し，机上にon-elbowの姿勢で第1期と同様の遊びを提供した．第1期よりも泣くことが少なくなり,姿勢もわずかに安定した．

＜第3期：遊びに合わせて姿勢を調整した時期＞

役割分担や姿勢は変えずに，さらに座位が安定できるように，片手で支持しもう一方で活動する遊びを提供した．こちらが提供した他の課題に対しても以前より集中して取り組めるようになった．

【結果】

机上活動では座位姿勢や上肢機能がわずかに安定した．また，治療中に泣くことも減少し，以前よりも持続して治療プログラムに注意を向けることが可能となった．他の活動も行えるようになった．

【考察とまとめ】

岩崎は「おもしろさが感じられるからやる気が出，集中できるようになるのである」と述べているように，今回，症例が楽しいと思える遊びを中心とした治療プログラムに変更したことで，以前よりも課題に対して注意の持続が可能になったと考える．また,第1期では楽しんで活動できる姿勢が不十分であった為，遊びに合わせて姿勢を調整した．その姿勢で遊びが継続されたことで，座位の安定性が向上し，上肢機能も向上したと考える．また，姿勢の安定は，注意や活動に対する集中を更に高め，結果的に感情を少しコントロール出来る事に繋がったと考える．この事が他の活動にも興味を持つようになった一つの要因と思われる．今後，更に様々な活動を行えるように遊びを変化させ，まずは一人で座位保持可能となることを目標にし，ADLに反映できるように介入していきたいと考える．